能力の貯金でチャンスをつかむ
―女性の積極化で自由な選択肢を

桜美林大学　経済経営学系　教授
筑波大学　客員教授
馬越恵美子

女性活用元年の到来

統計的には日本の女性管理職比率は世界的にも低い。ただ、最近は外国人活用と同様に女性活用の流れも本格化している。安倍首相が女性の活用を打ち出したことは良いことだ。私自身も、その変化を実感しており、今が「女性活用元年」と思っている。

自由平等な選択肢が理想

結論から言うと、男女とも同じ働き方・人生を選択できる社会が理想だ。日本の女性はcaregiver（お世話する人）の役割を果たしてきた。極論すると、家事、子育て、介護の全てを女性が担当し、男性は単に外で働くだけだった。最近では女性の社会進出が進んできたが、従来のcaregiverの役割はそのまま女性が果たしている。これからは、それを男女両方で様々なかたちで分担する選択肢がある社会を目指すべきだ。男性が家事・育児、女性が外で仕事、というこれまでとは逆もＯＫ。あるいは、一方に押し付けるのではなく双方で家事・育児を分担するなど、様々なかたちが自由に選べるのが良い。

本来的に男女間の違いや特性は存在する。しかし、どちらが外の仕事、家事・育児に向いているかは決まっていない。家事・育児が得意な男性もいる。それぞれが得意な分野で活躍すればいいし、それができる社会であるべきだ。そうしないと人材・才能の無駄使いで、日本としても損失だ。

持論だが、主婦も含めて女性には、人をリードして仕事することができる素養があると思う。なぜなら、女性は家庭で親、夫、子ども全員の世話をしながら、日々、頭も手足も動かして全ての家事や近所付き合いまでこなしてきたからだ。

確かに、仕事ができても専業主婦を選択する女性もいる。それは、男性中心の日本企業における働き方に問題があるからだ。朝から晩まで仕事に追われ、週末も付き合いで会社に縛られている姿を見ていると、それよりも専業主婦をしながら、パートでもいいので自分の好きな仕事をする方がよほど有意義な人生を送れると、女性が考えても無理はない。

ただ、日本では少子高齢化が進み、定期昇給も期待できず、共働きをせざるを得ない女性が増えている。さらに、以前に比べると電化製品や外食産業の普及、また家事の外注もできるので、家事労働の負荷は減っている。そのことにより、女性の活躍の機会は大きく広がっている。高学歴化している日本女性を活用しないのはもったいないことで、今や、「女性の活用と活躍」の外的条件は整ったと言える。

２極化する女性たち

最近では、男性以上に活躍する女性が増えている。管理職になり、さらにステップアップを目指してMBAを取得する女性も多い。残念なことに、そのような女性は、往々にして独身であったり既婚者でも子育て経験がない人であったりすることが多い。それだけ頑張らないと男性中心の社会では女性が活躍しづらい事情があるからだ。